

学会ハイライト

第32回日本皮膚病理組織学会総会・ 学術大会を終えて

(平成28年6月18日、浅草橋ヒューリックホールにて)

山元 修

鳥取大学医学部感覚運動医学講座皮膚病態学分野

日本皮膚病理組織学会理事長

はじめに

2016年6月18日に、東京都浅草橋のヒューリックホール(図1)にて日本皮膚病理組織学会総会・年次学術大会を、学会理事長として開催しました。梅雨の合間の晴れに恵まれ、会場の立地条件の良さから、また充実した内容から、過去最高の147名の参加者が集まりました。

日本皮膚病理組織学会は、前身の「皮膚の病理組織同好会」を母体として1985年に「日本皮膚病理組織研究会」として発足し、1989年からは現在の「日本皮膚病理組織学会」と名称を変えており、年次学術大会も今年で32回目を迎えております。学術大会は慣例によって毎年理事長が会長を務めることになっております。筆者は2012年より理事長を拝命しており、年次学術大会会長も2013年の第29回大会から数えて4年目となります。

本学術大会の骨子

第29回大会(2013年度)までは、演者より提出されたH&E病理標本を討論するという、いわゆるスライドコンファレンス方式のみで行っていましたが、第30回大会より新たな試みを始めました。すなわち、従来どおりの口演に加え、ポスター展示による同コンファレンスの場を設け、さらに幅広く演題を募るために、ベテランの指導やアドバイスを欲しいという若手中心のアドバイザリーセッションや、研究演題発表の場も加えました。



図1 浅草橋ヒューリックホールのメイン会場。つい最近オープンしたばかりのきれいな会場でした。

また、第29回大会よりバーチャルスライドを用いて事前にweb上で発表演題症例の病理組織画像を配信しています。また、学会員は各演題について同じくweb上での掲示板を利用した事前討論に参加することも可能になりました。また、各演題の発表内容や討論内容の概要は、記録集としてまとめられ、会員であれば自由に閲覧できます。

一般演題(スライドコンファレンス)

口演20題、ポスター討論2題が発表されました。あらかじめ参加各施設にはすべての演題についてバーチャルスライドデータを配って診断をお願いしており、それらを事前に集計した結果も併せて討論が展開されました。各施設からの難解例だけあって、毎年のことですが討論は白熱し、たまに



図2 アドバイザリーセッションの様子。ベテランが若手に懇切丁寧に優しく熱血解説を行っていました。

結論の出ないこともありましたが、病理組織を多方面から考察すべきであるという専門家の意見は大いに参考になります。また、新しい疾患概念の解説や新たな診断手技の紹介もあり、診断病理学に関する最新の知識を吸収する場になっております。座長は毎年ベテランの皮膚科医、病理医が担当しており、メリハリのある進行をしていただいております。

アドバイザリーセッション 「皆で解決！あなたの疑問！」

私が理事長就任時の目標として掲げた「皮膚病理を志す若手医師の発掘と育成」の実践の一環として設けられているセッションですが、新進気鋭の若手から自身が疑問に思っている症例について3題がポスター発表されました。座長も4名の若手を抜擢し、フロアのベテランとともに優しくかつ的確にアドバイスを行っていました(図2)。このセッションは発表者のみならず、その他の若手の医師にも大変勉強になる内容と思いました。

研究演題

これまで本学術大会には、まとまった症例に関

する皮膚病理研究についての発表の機会がありませんでした。このままの診断学のみの皮膚病理ではいずれ行き詰まるのが容易に予想されるため、それを憂いて第30回大会から設けられたセッションです。毎年、国際的学術雑誌への掲載につながるような素晴らしい研究演題が発表され、本邦の皮膚病理のレベルアップに貢献しております。本年も末端黒子型悪性黒色腫の分子病理学、eosinophilic annular erythema、基底膜構成蛋白と乾癬の病態との関係、イヌ肥満細胞腫についての珠玉の4演題が発表されました。とくに4題目の演者の川原井先生は獣医師で、本学会のメンバーのすそ野の広さが窺われます。

インターナショナルセッション

今年が目玉セッションでした。これまで本学会と韓国皮膚病理学会は断続的な交流を続けていましたが、アジアの皮膚病理レベルの向上を目指すうえで、まずは両学会が継続的にジョイント事業を行うことから始めよう、ということになりました。今年は本学会が韓国皮膚病理学会の理事長(Ajou大学You Chan Kim教授)を含む主要メンバー7名を招いて、うち3名に本セッションの演題



図3 インターナショナルセッション後の記念撮影。発表者は、韓国皮膚病理学会メンバーおよびわれわれの学会の主要メンバーとともに和やかに写真におさまりました(前列右から5人目が筆者。筆者の右隣がKim教授、左隣がLee教授)。

を出していただき、また日本側からは4名の若手を抜擢して英語発表を行ってもらいました(図3)。来年度よりは、それぞれの年次学会大会に互いに演者を派遣して継続的な交流をはかることになっております。韓国側の発表は非常にレベルが高く、日本側もうかうかしてはおられない状況であることが若手にもわかったようで、今後の両国の交流でさらなる刺激が期待されます。

別件ですが、米国よりDr. Ellerbroekという皮膚病理医が日本の皮膚病事情とそのレベルの視察のために来られました。非常にエキサイティングであったと感想を述べられました。

「皮膚病理道場あどばんすと2016夏の陣」

日本皮膚病理組織学会学会大会そのもののセッションではありませんが、サテライト事業として、毎年年次大会の前日に設けられている、双方向性実習型講習会です。対象者は主に専門医資格取得レベルの医師で、日本皮膚科学会学会大会での「実践！皮膚病理道場」と同じ形式で、座学で学んだ後に、配布されたバーチャルスライドを用いて自己学習をすると同時に、疑問点についてチュー

ターから個別指導を受けることができます(図4)。従来本学会の単独主催であったため参加者は本学会員に限られていましたが、本年度より日本皮膚科学会との共催になり、広く参加の道が開かれました。本年のテーマは「菌状息肉症」と「皮膚の末梢神経腫瘍」で、それぞれ大塚幹夫先生(福島県立医科大学)と福本隆也先生(札幌皮膚病理診断科)に解説をしていただきました。受講生は皆熱心に取り組み、チューターに活発な質問を浴びせかけていました。また、韓国よりのゲストであり筆者の友人であるDong Youn Lee教授(Samsung Medical Center)も視察に参加され、韓国での教育の参考にしたいといわれていました。夜は秋葉原で恒例の「今夜は病理ナイト2016」(若手交流飲み会、参加費無料)が開かれ、受講生は皆弾けていました。

今後の展望

1)これからの学会大会のあり方

今後本学会大会では演題数の増加が見込まれ、現在の日程では窮屈になるため、来年度からは2日間にわたって行う予定にしております。韓国と

図4 「皮膚病理道場あどばんすと2016 夏の陣」のセルフアセスメント風景。講演を聴いた後PC画面上で自己学習すると同時に、チューターから熱血指導を受けます。時には若手も持論を展開し白熱した討論になることがありますが、これがまた楽しいのです。全体に和気あいあいとした雰囲気です。



のジョイントセッションも常設され、さらに診断に関する討論が中心になるスライドコンファレンスとは異なったスタイルの、より考察にこだわりたいいわゆる症例報告形式のセッションも設ける予定です。理事長目標である若手医師の育成のためにも、アドバイザーセッションのさらなる充実をはかりたいと考えております。本大会は従来敷居が高く、討論の場でも皮膚病理マニアから難解なコメントを浴びせかけられる、という誇張された印象があったようです。筆者が理事長になってからは、この印象を払拭すべく、とくに若い発表者に対しては柔らかく接するようにベテランの皆様をお願いしており、雰囲気が穏やかになってきておりますので、本誌読者からも気軽に演題応募をお願いしたいと思っております。

2)若手の活動

われわれの学会では若手の活動を促すために、さまざまなサポートを行っています。学術大会に積極的に演題を出してもらうよう、所見の解釈についてのアドバイスをしたり、韓国皮膚病理学会学術大会での発表のために推薦をしたりしています。また、数年前より皮膚病理を熱心に志す若手の集まり（リーダーは兵庫県立がんセンターの高井利浩先生）をつくっておりましたが、本年度の総会にて正式に「草志衆」という名称で発足しました。新しいリーダー（衆長）として、大阪市立大学から鳥取大学に研鑽に来ておられる柳原茂人先

生の就任が認められました。今後は、研究テーマを割り振って大会で発表してもらうことも視野に入れております。

3)皮膚病理道場あどばんすと

「皮膚病理道場あどばんすと」は、本年度より年2回開催されることになりました。本年度2回目の「皮膚病理道場あどばんすと2016冬の陣」は、私が会長を務める第68回日本皮膚科学会西部支部学術大会前日の11月18日に開催されますが、すでに募集は始まっておりますので、受講希望の方はお早めにお申し込みください（詳しくは学会ホームページにて）。

おわりに

最後に、本学術大会に演題を出してくださった皆様、活発な討論を行ってくださった参加者、そして運営に協力してくださった皆様（とくに草志衆）に深く感謝申し上げます。お陰様で学術的にも満足のいく大会になったと思います。われわれの学会も若手が徐々に育ってきており、今後の皮膚病理領域の発展がますます楽しみになってきました。現在、日本皮膚病理組織学会会員でない若い方も、一度われわれの学術大会を覗いてみてください。本学会活動に関心のある方は、是非ともわれわれのホームページ<http://jds.umin.jp>にアクセスをお願い申し上げます。